

# 日本語教育実習と振り返り

## －日本語教師への一歩－

日本語教育方法論講座・M2

筒井紀衣

### 日本語教師としての自分を知る

#### 1. 実習と振り返り授業全体に関して

##### 1.1 実習

私は、実習時期に教職課程の集中講義が重なったため他の実習生に比べて準備期間に余裕がなかった。特に、第一週目の一回目と二回目の授業が準備期間一日のみというタイトなものであった。しかし、実際に教えている日本語教師も準備期間の少ないなかで授業準備をしている話を聞いたことがある。今回、現場の日本語教師と同じような状況を経験でき、短い準備期間をいかに活用するかについて気付きがあった。

教育実習では、自分の授業だけでなく、TAの方や他の実習生の授業にも参加できたので、多種多様な授業のやり方から多くのことを得られた。

##### 1.2 振り返り

実際に教えている自身のビデオを見たり、授業の文字化をしたりして自身の授業を振り返った。その他に、他の実習生と一緒に授業に対する考え方や自身の授業計画と実際について話し合った。長所短所を指摘し合ったりもしたので、客観的に自身の授業や自分自身を見つめ直すことができた。

#### 2. 反省点と課題

実習と振り返りを通じて、自分は「授業にメリハリがない」「活動の時間が少ない」授業をしているということが分かった。授業準備の時に「授業活動の計画を立てる」ことに意識が集中していて、肝心の「学習者に何を学んでもらいたいのか、身につけてもらいたいのか」「学んでもらうため、身につけてもらうためにはどうしたらいいか」まで目が向けられていなかった。そのため、実際の授業では重みづけがないものとなっていた。

計画の時点で「学習者に何を学んでもらいたいのか、身につけてもらいたいのか」

をしっかり考えることができているならば、ある程度の学習者の躓きを予測できたはずだ。また、授業活動としての重みづけを行うことができ、目的に一貫性のある内容になっていたと考える。

### 3. 今後に向けて

私は、授業をする前の準備活動から場面の提示や練習の重みづけについての考慮が不十分であったことを痛感した。教師が学習者の誤りに対してフィードバックするときには、「どんな言葉や表現を使ったらいいのか。それはなぜなのか」を考えなければならない。また、活動をするときには、「その活動を通して何を学び、身につけることができるのか。それはなぜなのか」も考えなくてはならない。

授業準備期間が短かったとしても、教案を作成する際は、常に学習者を意識し、どうしたら学習者にとって学びの多い活動になり、フィードバックになるのかを考えて取り組むべきである。そして、そのように作成した教案を実践していくことでさらに自身の指導に対する短所が明白に見えてくると考える。